



営農NEWS



トマト灰色かび病の発生に十分注意しましょう

越冬トマト栽培では、厳寒期に入り、施設内が多湿環境になりやすい状況となってきます。

このため、近年は発病時期が前進化している灰色かび病の発生に十分注意が必要となります。

灰色かび病はやや低温を好み、多湿の環境が続けば多発生し、一度多発生してしまうとなかなか薬剤による防除効果が上がりにくい病害です。

病害虫発生予報1月号(病害虫防除所)によると、12月中旬現在、トマト灰色かび病の発病株率(本年6.5%、平年1.1%)、発生地点率(本年38%、平年12%)とも平年より高い状況であることから、1月の発生量は多いと予想しています。

このため、灰色かび病の予防に努めるとともに、施設内をよく観察し、発病の早期発見と発病初期の防除を徹底してください。

なお、有効な薬剤に対して耐性菌が出現しやすい病害で、薬剤散布後は常に防除効果を確認しながら分類の異なる薬剤で防除を行う必要があります。

下記の防除のポイントを参考にして発病抑制の栽培環境を保持し、的確な防除を実施して、高品質で安定した収量確保に努めてください。

<防除のポイント>

- 1) トマトの健全な生育を促すため、適宜な整枝、剪定による採光や通風の確保、適度な灌水や追肥など、適切な肥培管理に努めてください。
- 2) 花卉の落ちが悪いと、果実灰色かび病の発生を助長しますので、出来るだけ枯花を取り除きます。
- 3) 施設内の多湿条件が続くと、急速に灰色かび病が発生します。昼近くになっても、作物に水滴が残るような場合には、暖房や送風、換気等により施設内の湿度をできるだけ低くするよう努めてください。
- 4) 被害果などを見つけたら直ちに摘除し、施設外へ持ち出して腐熟化させるなど適切に処分してください。施設内や近くに、そのまま放置することは(伝染源となる恐れがありますので)厳禁です。
- 5) 薬剤防除は予防または発病初期から行い、晴れた日の午前中に散布して、夕方までには薬液が乾くようにします。
- 6) 湿度の高い施設では、防除薬剤に「くん煙剤」なども活用しましょう。
- 7) 薬剤耐性菌の出現を抑制するため、同一分類(コード)の連続使用は避けて、ローテーション散布してください。

表1 トマトまたはミニトマト灰色かび病の主な防除薬剤 (令和2年12月24日現在)

薬剤名	トマト	ミニトマト	希釈倍率または使用量	使用時期 / 使用回数	分類
ファンタジスタ顆粒水和剤	○	○	2,000~3,000倍	収穫前日まで / 3回以内	11
パレード20フロアブル	○	○	2,000~4,000倍	収穫前日まで / 3回以内	7
セイビアーフロアブル20	○	○	1,000~1,500倍	収穫前日まで / 3回以内	12
フルピカフロアブル	○	○	2,000~3,000倍	収穫前日まで / 4回以内	9
ゲッター水和剤	○	○	1,000~1,500倍	収穫前日まで / 5回以内	10と1
		○	1,500倍	収穫前日まで / 3回以内	
ロブラール水和剤 ※	○	○	1,000~1,500倍	収穫前日まで / 3回以内	2
ベルクートフロアブル	○	○	2,000~4,000倍	収穫前日まで / 3回以内	M7
		○	4,000倍	収穫前日まで / 2回以内	
ロブラールくん煙剤 ※	○	○	くん煙室容積300~400m ³ 当たり100g	収穫前日まで / 3回以内	2

注) 1. 分類欄には、FRACコードを記載しました(コードが2つは、混合剤です)。同一分類(コード)は作用点が同じなので、連用は避けてください。

2. ※印の薬剤は、合わせて3回以内の使用回数です。

※ 上記の散布剤以外に、暖房機のダクト取り付け口付近から製剤をダクト内に直接投入し、暖房機を数時間以上稼働させることで灰色かび病を予防する微生物農薬(ポトキラー水和剤:分類BM2:発病前~発病初期 など)があります。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話: 029-291-1012 FAX: 029-291-1040